



猿蓑の巻之六

附合之部歌仙四卷

或るの羽も刷ぬと云ふ 志と云ふ 去来

發句集卷頭の句によつて猿蓑と題号す又附合ふはつて  
 此は準として時雨の歌仙を以て始り守は句意諸説ありて  
 詠者の見におよぶれてそれ真解を得る事ありて此も相  
 成かいつくはぬと作る句も句意を文字より  
 付て解すことありて言外の意を味ふ事ありて肝要  
 なる和漢にもよ凶悪の事とするの形も亦ありて  
 やうに心よるべしと云ふに時雨の事ありて

形も格もよき〜満つて〜のるや〜と〜の義に〜  
 の思ふ所は時雨のさむま淋〜と〜餘情にたれぬ〜と〜さる  
 の相も刷ぬ〜と〜思ふ情意を起して其さぬとある如く家小  
 初の字の味もあつるや再々吟して餘意味もあつる刷ハ  
 かいつくろいと訓ず和漢朗詠集源為憲詩鶴閑翹刷千年ハ  
 雪白居易鶯詩示劉叟句中喃々教言語一々刷毛衣ハ長慶集卷第一

一ゆき風の木の葉もあつまる

芭蕉

服句の附方凡五体と定て打添處附を附以附對附之外を  
ウキスル 相對の附ホ有て初字のうちよき作小附て学ふを〜自然の風雅  
ハシム と云ふも變化の間に會得ハ〜との句打添の服に〜と合

時句の作りかへたつるさめを附し初の字は係をねさるる附に  
 して冬の冬木まの梢に〜うくまりたるさめは虎につれて附ま  
 時句の模様二句の言外を思ひぬら〜

股川のぬ〜ぬ〜川〜〜 凡兆

才三を女場の餘景を採りてむす時句のぬまを枝川の淺  
 水を里人の渡り行さぬと生〜と附えな場一橋の附  
 に〜句の〜と只川を越さぬと

たぬまを〜と〜と 一條張のら 史邦

そ川を越し行人の何をうたふらんと採りてね狸と後

篠弓を持てけりも人の用をえ出りて附たるし

まいつ戸おせり這く体育の母 蕉

前向の篠弓を一持し内よ入て附る句にて篠張の弓  
の美<sup>ナガシ</sup>熟土などに為てありたると見てそよ家のよき母を附たる  
とらあり裡の生ありぬきとて驚びたるまひるをた葛がづの  
這まひるの家をよきとてせよまてそよ家の月影よたれよ語より  
月と雲とをよつはにいて月よ子細きとてなほ景色に化りて  
古寺まのたまもなるぬきや

くふもられさ名物の利木 未

附意ハ起情にけり茶の住家の主人およめたりこすのまみあり  
院まもくよよくあり情心

か<sup>ウ</sup>さあろ墨侍おろく秋葉 卯

その月のおろくさあろ人の侍をたしこまかろ人ありて附たる  
一句の取廻しにかななるも墨侍おろくこまかろつまはれん秋葉  
てい季をよひたる計りて子細き月も秋葉も秋の葉なり  
ちれと裁は論なり

くさくろろまめりやの足ば 兆

茶の人およめたり二句一意も人のめりやの足ば

ていつてもいふこと

何れもいふ言の内と云ふあり

来

茶の人の一掃してきりやらのほろろを言行を被  
るる験者ありといふし一掃の附る句作の語は死活に取  
ありお学おのよき事あり

里へくるおけ午の貝始く

蕉

茶の言行を奪入して居る大茶にの強者の言の行  
法あり午の時に終りて下山しとやうおけけい貝の  
をむまの貝へして里へくるおけ午の貝始くと附るこ

ほつてくる去年お福の言

北

又午の貝へいふおにてを飯の言をいふそれを午の貝  
いふとて午載集に赤漆清の言よりいふとてやむまの貝へい  
つてきてひつどの言よりいふとて前句の言をいふとて  
たもやうかく里の言をいふとて里にてを飯の言をいふ  
つてくるや午時ふありた言をいふとて里人の言を飯休に  
いふとて田舎飯の言をいふとて田舎飯の言をいふとて  
るくといふ言の言にいていふとていふとていふとて  
記重橋捕をいふとて後水の言にいていふとていふとて  
るけふみくたをいふとて省かすとして拾の小袖にいて

奉もど練貫乃小袖垢つきまゝにぬきかきかき  
加茂社百首慈徳の女もねむり井はにむすみま  
麻の衣すまゝ成美もけ考を借活ふ記し出してまゝ  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

芙蓉谷のくらくくとちる

邦

前の変化の附けして芙蓉谷の蓮のまゝまゝまゝまゝまゝ  
凡にまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ  
意を二句の言外にけきぬまゝまゝまゝまゝまゝ  
也木芙蓉の秋まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

吸物と先出まされ

蕉

家に起情して蓮池ある寺の池もくく生く附くと  
無一水煎寺と肥後本熊本江津川上三里汁のり  
け寺池中水苔を煮ずぬにまゝ水苔をまゝまゝ  
東西折話に支考る句に苔の名は月まゝまゝまゝ  
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

三里まありの道くえける 来

相對の附けしてまゝ吸物を振舞んとす客の上を  
附くまゝ家に前句のう勢を取て附るまゝまゝまゝ

祖翁は梅竹を常に論じ、多う前のよき詩句の  
間小吸お拵つて拵出さるる、いさゝか月意なるらん、客の  
思ふ所を一句のうへにすまるともや出まされし、其の勢  
たるもの急率なる句は鈍ま句を附てハ梅竹合はる  
ハ亦も夕日かむけしに云里あるのたをかくえたるハ實  
と居るれぬさ身を附たるハ上女のこ海まハ、こよひに  
まうつたかみ合たる趣、二句の言外に主客の應對  
十分おぼるるを、たゞ味ひて学ふ趣

この春も盧同の田力居たりふ

邦

前の客の僕と附たる句にして盧同ハ詩人の同公に

作るなり、唐の東都に住して自ラ玉川子と号し、たゞ  
家の盧令ハ假に用ひたる名にして風騷人の僕とよぶる  
とくも、一居たりとハ俗に長年す、とよみ又古文  
前集七言古風長篇寄盧令、韓退之作云玉川先生洛城  
裏破屋數間而已矣、一奴長鬚不裹頭、一婢赤脚老無齒  
下畧是ホの事を思ひ合はれてお、又盧令の詩に逢鄭三  
遊山といつる類、たり三里ありとよみ、その遊山の縁を  
思ひあたるを知る、たゞ詩ハ三體詩に見えり

木つらるる月の懸お

北

前の風騷隱者をもの用を見失して接續さ、本意を

やうする人と附て又一句の仕立幽玄にして園中を象  
色をわらわぬはあやう

花をうらな花ふ并ふ家手水陸 蕉

二句一表にしてその意を里の坊と又一匠の操採を  
そけたお句也

いとち連——と朝の暇—— 来

朝の意をまする人の起情にして物おまがれてと朝の  
暇にちもいつしの連り——とハ風流ゆえ先——の附意  
を理なきを理とするとは家のるりにして前に縁なき

句にして何の意もなき朝の人ゆり状を思ひやうとふは縁取  
て連続す——と味ふ也——親——ハ味うハ附きよふ  
は是亦の附意を考ふべき——

いちど——に二日乃物も喰て最—— 此

朝の人の用にして変化いち度ハ二日始りの給物を喰  
て是と親——とぬやうに一句を晒落に作りたるはて句  
のうへに深き意あり二句の言外にいろやとよの人物を附  
たるは味ふ也——其暇もまのい——と作りたるといふハ一度に  
二日始りの物とも給て欠走る日備ふ脚まといふ人物を  
見る——と附きよふといふは大量のふと見



て扱ハ候乃おわいも人し附るにて新なる細なる  
をけ小すむさき山如小 風 邦

雪ユキケのさむきとらふ中にしてあは人の坐歩のた  
の附に〜々也住居〜んた〜んけと清キヨてよむ舞〜さ  
気とハきあ〜んとて黄ワウのまを〜んと清輔キヨヘ初ハツメ抄  
に〜々も堀川次郎百首俊頼の歌に〜んち如〜んを  
たまひ〜ん〜んをさきまのえと清〜ん

火〜〜 小等コトウれハ宅ヤクの寺 来

この場の附に〜々高山の寺チノ寺ジヤウの用ヨウし廻船通行の

目高に〜もを燈籠チヨウロウをの付を合アヒて附ツケるよや

ほ〜〜に皆ミナ清キヨ仕シ上ウエ棟トウ〜〜 蕉

け附ツケハ只何ナニもあ〜火〜〜に宅ヤク寺ジヤウとよに火ヒ暑ナツの  
夕ユフ等トウ像ゾウ也ヤの涼スズシ〜を思オモひやうたる句クマ〜てをを氣キに  
さむきと蒸ユキ表ヒラの附ツケし時トキの啼ナリ仕シ舞マユ以ヨリ如ニ時トキ節フシをさ  
や暑ナツや甲カウ子シ熱ネツ〜景色ケシキの庭ニワの附ツケに〜餘ヨリ人の迹アト句クマ時トキ節フシ  
の附ツケハ言コト外ヘに力チカラあるにて遠トホい何ナニと志シるを〜〜まゆのまづ  
満ミツ味ミひて探ウラる熱ネツ〜五月イツゴの末ヘ六月イツロクお旬ツキ火ヒ暑ナツの季キ候キウん

瘦骨スエボネのま〜起オキ直ナる力チカラなよ〜 邦

其の如きなりけりともや時多し留仕舞されもいさ  
肥立の如きなるよみを附しむる起情の附し

隣をかりて車川こむ兆

前句の類ふ人を源氏物語の夕影の巻に大貳乃先おび  
くまづいひてあまに成母きよきあつんとて五條あまいさづ  
ねておりにし車いさづいしとすしりきれい人きよき  
まづめさもやまもきもるまけ付の附しといふ大貳の  
乳母の隣ハ夕影の上のまもあまの得をとりて隣  
をかりて車引しよふ又將作の場ことり人いさづ維光ハ  
大貳のあまよる子源氏のあま礼なハ民部大補之或註兼  
好法師侍<sup>あま</sup>田井の座に就り居て煩りし時帝より探訪  
米を給りしりきりけ付といふ

うま人を担敷垣よりくらきん 蕉

け附<sup>け</sup>経場<sup>け</sup>に<sup>け</sup>て<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>化<sup>け</sup>の<sup>け</sup>附<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>前<sup>け</sup>句<sup>け</sup>の<sup>け</sup>よ<sup>け</sup>め<sup>け</sup>を<sup>け</sup>思<sup>け</sup>ひ<sup>け</sup>お<sup>け</sup>な<sup>け</sup>す<sup>け</sup>て<sup>け</sup>  
車引しよるまて思ひる男<sup>け</sup>人<sup>け</sup>に<sup>け</sup>又<sup>け</sup>念<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>の<sup>け</sup>破<sup>け</sup>  
ま<sup>け</sup>よ<sup>け</sup>り<sup>け</sup>た<sup>け</sup>る<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>の<sup>け</sup>句<sup>け</sup>ふ<sup>け</sup>て<sup>け</sup>う<sup>け</sup>き<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>人<sup>け</sup>とい<sup>け</sup>ふ<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>に<sup>け</sup>て<sup>け</sup>  
か<sup>け</sup>た<sup>け</sup>ち<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>を<sup>け</sup>破<sup>け</sup>り<sup>け</sup>て<sup>け</sup>あ<sup>け</sup>ら<sup>け</sup>る<sup>け</sup>句<sup>け</sup>作<sup>け</sup>の<sup>け</sup>依<sup>け</sup>り<sup>け</sup>て<sup>け</sup>附<sup>け</sup>合<sup>け</sup>集<sup>け</sup>註<sup>け</sup>  
洛<sup>け</sup>其<sup>け</sup>成<sup>け</sup>云<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>ハ<sup>け</sup>竹<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>紫<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>ハ<sup>け</sup>す<sup>け</sup>念<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>を<sup>け</sup>あ<sup>け</sup>ら<sup>け</sup>に<sup>け</sup>ら<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>が<sup>け</sup>り<sup>け</sup>て<sup>け</sup>担<sup>け</sup>  
撰<sup>け</sup>也<sup>け</sup>穀<sup>け</sup>垣<sup>け</sup>を<sup>け</sup>くら<sup>け</sup>き<sup>け</sup>る<sup>け</sup>に<sup>け</sup>て<sup>け</sup>意<sup>け</sup>の<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>り<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>情<sup>け</sup>を<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>り<sup>け</sup>て<sup>け</sup>担<sup>け</sup>く<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>り<sup>け</sup>  
り<sup>け</sup>に<sup>け</sup>ま<sup>け</sup>り<sup>け</sup>た<sup>け</sup>り<sup>け</sup>

いよや別わかの刀やいば——出い 来き

前の扱つか扱つか垣かきよりうらをんよゑの別わか縁ゆかりとてそのさ  
人の別わかれぬ用もちをえ生なして附つきゑるる——保たも子こ盛さか  
表あ記かいそくして大おほきやうなるを忘わすれふれこ——男おとこのや人ひと乃なり  
ふるらん遊あそ女むすめかみもおひてあ——あまのすけりすの  
こふらんうなもそりり 景季

せ——けふ揃そろて——らをうらち 兆

又その別わかをする女むすめの風情ふうじやうをえ生なして附つきゑるるよてせ  
——心こころいづがち——女むすめの姿すがたとてゑる趣おも——

おりの切き——死し——い 見みよ 邦

け句又兼またの句皆みなより附つたる句に——てせ——げふ揃そろて  
を揃そろて——女むすめの思おもひつゑるるうらう死しをねとまゝぬと  
おろるる——まきまななる趣おも——思おもひ推おし——附つきゑるる句  
おろるるを男おとこの扱つか死しす——まきと解と——るるの得とへ次の  
句よりゑるる句——以上四句女むすめの上うへに取とり附つに——て中なかの二  
句ハ全ぜんくお意い句より——兼また後の句ハ枝えだおれゑの付つきゑるる  
——るる句——四句の附つき——一句くに揃そろ様さまか——て同どう一人  
の附つに——兼また附つき時ときハ害がいな——まき——け句をお死し  
け用もちをえ止とめて附つたり——解とるる句——





一 聖と作りたる手柄と申す一 城下所をを譲りて其の  
 るうぬき附し一 説多々良山の事と云ふは穩うあふ九富  
 士筑波のり名所の山と云ふ字もくてもあつたから云ふは  
 山といふ字も又山と云ふも句作りなれは詮ありとされと道具  
 も山とも人とも心にもくても是也一 強てかせんとする  
 は祖家の本意に依りて又句別信濃のやたふの  
 の春さくといふ附句あり是の山さるる句作りにて  
 心と持 草 秋 つくると 窓 如 也 北

その場の附に一 城下町に在る高家職人を指し  
 一 扱ハ馬の鞍作る職人の一 扱斎藤に任じたるは附  
 たる之語中見ゆ一 の附に一 扱せたとハ白のを指  
 されハその家の名と作りたるにて子細なりと云ふ  
 二句の言外に扱まじき相場の扱様又その系をも  
 扱一

松 扱の古きふふ木の芽もえり 邦

扱係に一 扱造る一 扱のくちり延え

去来九 芭蕉九 允北九  
 史邦九

是の連歌の式に一 扱尊の末に各ハ白敷を書きし

連歌に效ひて又其之上を對ニ下をオホ書式ニ

市中と物のふほひや夜の月 凡北

叶發句ハ市中ハシおハシ舞ハシ舞ハシ種アキナ種アキナのアキナ高アキナの物引ちどしたるふ  
くハシ暑ハシ暑ハシさハシさハシぬハシぬハシといハシいハシまハシまハシるハシるハシといハシいハシまハシまハシるハシるハシ  
もハシおハシ舞ハシ舞ハシにハシみハシりハシのハシ合ハシせハシりハシ句ハシのハシうハシのハシ物ハシのハシ白ハシひハシといハシいハシるハシにハシす  
きハシるハシもハシつハシほハシへハシるハシめハシらハシつハシとハシ候ハシ一ハシさハシにハシ引ハシかハシてハシ其ハシのハシ月ハシ乃ハシ清  
くハシ色ハシらハシるハシをハシ言ハシ外ハシおハシすハシせハシたりハシ

あけくくと門く乃 芭蕉

おハシ舞ハシのハシ舞ハシ中ハシ一ハシ門ハシ涼ハシくハシのハシまハシみハシたハシらハシくハシくハシといハシいハシるハシにハシ物ハシのハシ白ハシひ  
のハシ門ハシをハシ枝ハシ打ハシてハシ市ハシ中ハシのハシまハシみハシたハシらハシくハシくハシ一ハシ附ハシ合ハシ兼ハシ注ハシ夏ハシのハシ月ハシの  
涼ハシくハシくハシやハシ有ハシるハシまハシとハシ市ハシ中ハシのハシまハシみハシたハシらハシくハシくハシ一ハシ附ハシ合ハシ兼ハシ注ハシ夏ハシのハシ月ハシの  
明ハシるハシもハシつハシほハシへハシるハシめハシらハシつハシとハシ候ハシ一ハシさハシにハシ引ハシかハシてハシ其ハシのハシ月ハシ乃ハシ清  
くハシ色ハシらハシるハシをハシ言ハシ外ハシおハシすハシせハシたりハシ

二重の字取りも果さば穂お出で 去来

時ハシ良ハシ一ハシ時ハシのハシ附ハシにハシ一ハシ市ハシ中ハシをハシ田ハシ家ハシにハシ持ハシたハシとハシ一ハシ葛ハシ字ハシ  
二ハシ重ハシ字ハシとハシてハシ田ハシ字ハシのハシ生ハシをハシ取ハシ持ハシるハシもハシ一ハシ穂ハシにハシ生ハシるハシもハシ  
四ハシ重ハシもハシ有ハシるハシもハシとハシかハシやハシ句ハシ意ハシハハシ炎ハシ暑ハシカハシ稲ハシ穂ハシもハシおハシ出ハシでハシ  
延ハシ立ハシたりハシといハシいハシるハシもハシ一ハシ市ハシ中ハシをハシ田ハシ家ハシにハシ持ハシたハシとハシ一ハシ葛ハシ字ハシ  
稲ハシのハシ穂ハシをハシ生ハシるハシもハシとハシかハシやハシ句ハシ意ハシハハシ炎ハシ暑ハシカハシ稲ハシ穂ハシもハシおハシ出ハシでハシ





草<sup>ウ</sup>村小蛙こはろも夕まなくま 兆

おの長船指をさしたる男の形にも似せば草村に蛙のふ  
ききもに駭馬たるまを自つるま母ふく形と口と心とおま  
するハ世の中の風情に似たうしきつりて俳諧の意

蕨の芽もろりに 刈焼かりりす 蕉

蕨の芽こはろハ女と見や庭の蕨の芽をまうに生る小橋  
さう刈焼をまうはしきつりて母もハ句の儚さをししてこは  
ろとこを焼くて二句一意の母にして駭馬たるま母の伊と  
母てその場の母以てししたるしとまを魚一許六も自誇瑞

云は向むりの字蕨のこはろにもたれてむつりて刈焼すげりし  
しといふ二句一意の母をまうぬちこはろとこはにありま  
又も二句一意の母をまうぬちこはろとこはにありま  
許六も詠りて母

道心のたよりハ花のつ布む 特 来

おの蕨の芽を取に生るる人の上にしてまの人を尾入道と見ても  
此道心のたよりハ花のつ布むよりあるなりし一作し  
新尾と見てもまのつ布むと見へし一説に筑紫の住人加藤忠  
尉磐石杯中小橋の茶の蕨散りもまを道世と見へし  
いふ原空上人の言をまうて俗に世宣列及心と云

能登の七尾の冬ハ 住 ころき 兆

能登の七尾ハ猿原子軒といふ土地にして漁獲を以て  
富一とする。地ふしてはとも水濱にてはむす地あるをその実  
情を附てみるハ住ころきと云ふのは心老人の住地を七尾こと  
うきよといふ所又見佛上人の住地ハ舟山栖徳の聖所也  
ハ能登のふに通ひ路よと探集抄に云ふはそこの思ひ入  
りたりともや

魚の骨とらめるときの老を足て 蕉

魚の骨ハ茶臼の七尾町志を引く老を足てハあるは住ころきといふ

の骨と云ふはとハ俗に云やぬるといふ事と先車いり只  
一句のうくに極老と云ふる様に句作りたるにて別々子細あり  
成美注 塩藁地を引て汝糖ノ条ニ云人モ此草ノ莖ヲニギリテ  
スハズレバ甘キ汁アリト云云志す通音ならバ證とすをまじ

待人入 小市門の溢 来

此附ハ源氏物語未搦むの巻に在りしと云人モこれと云ふ  
以車いりハ市門ハ市ノ門也市ノ門ハ溢のありヨリ云ふなり  
海のいとこト云ふは市ノ門ハ市ノ門也市ノ門ハ溢のありヨリ云ふなり  
と云ふは市ノ門ハ市ノ門也市ノ門ハ溢のありヨリ云ふなり  
を入ると云ふは市ノ門ハ市ノ門也市ノ門ハ溢のありヨリ云ふなり

うろくり屏風を倒す女子大

兆

氣後意の句こそあの物後乃流の句に目もつきのハクもちかく  
れりておすしゆまといふとてその伊を句作りて屏  
風を倒すとハ倒すこといふされと待人ハ舞よめとも珍客  
の美男とも見て屏風お倒すも美女子の挿擧  
通情の附えと見るる勝り

湯殿ハ竹の美貞子傳

蕉

又その情の附にして是も探りて見るるもたま拙君のたは  
しむすぬぬにておとせばそれと思ひ合せて美貞子傳  
附たるにや待人入と附するより三句お後の伊に通つ小所  
門に湯殿被さうといふ發りぬれ吾も三句踏きて中の句  
屏風と出たて居るも細き一お裁にハあつてゑる  
又小所門の溢ハお後の伊もゑるれと流の二句ハお後れ  
と見るるあしと品も場のたのむもさぬとて半して附た  
ことその附意のあを述ぶる一はまぢちにお後の伊こと  
せむ附意もお後れと死おとあること品附あせたるらんにて  
伊の急水通いこと必る也一欺ひととお後の伊  
計にて附たらんハ變化もなく手後もな一尋もその場を附  
らんと場のうちみ見生して變化するも既に小所門が  
湯殿とを字変化したるにてと知る也一附意の解情か

おしとてふとてふとてふとてふ

苗香のうたを吹流さむ夕嵐 来

け附又その場にいておと引生一変化一たる之苗香ウイキヤウ  
の白ひ湯釜一通ひ来ると見出して我をを噂ウイキヤウ伝ふるもな  
く針上の畑庭に植ふる苗香のまゆ針小作りて内の用紙計  
ひたるを道するのまゆ針苗香ハ藥種にして又香具に  
も用ひ和名くれのまゆ針のりふのりて雅俗ともに唐音よて  
ウイキヤウとほし突ハ秋香也

僧やくさむく寺ふのるる 兆

苗の苗香を植ふるといふる人の庭にや畑まやと探りて俗  
人おとににおうーかーとて寺とてそれとて寺と改めん只  
僧のまゆ針寺に植ふるまゆ針を附ふる之一句の仕立らまゆ針乃  
うまゆ針言外小僧のまゆ針寺に植ふるまゆ針を記せる白之和漢朗  
詠集温泉坊々詩に蒼苔路滑僧歸寺紅葉聲乾鹿在林  
此一將作とてのるるや

さる引の猿と世を経る秋の月 蕉

僧の胸も途中ををばしその端を探りて猿引小行逢たりと  
生して附ふる途中の中かふ人かあつて中へ僧に對して猿  
引と西風の風流たり白作のうに猿引と喉中にまよるる

とうづくまりたる糖の甘味もやして母を生を越すにせられた秋の  
月と結んでお向のやみくもにゆるまき香の甘味をおかたりと  
味小るしは附きの糖れもうちにも指糖紙附けて最向  
上の血中へ附合の肝要として学ふ趣の附えとよ味ひて意  
味考ふ趣し

年ふ一斗の地子たる也 来

精門の月の附にし世を降るとふより糖引ながり年に一  
斗の地子年貢を生るといふ意也

五<sup>+</sup>六<sup>+</sup>年生木つけ 漕 兆

其の地子たる坊の牛一の附にして田家の傍に何る溝牙  
生木をおくはるはよくある也またすりの海のみたまりを  
いふ也

豆は袋ふるとよしは黒はのみ 蕉

あたまりとゆるに用をえり起情の附あり又水たまりにか  
りてはるそしらたりの思はこ土に豆は袋をよしといふは  
ぬやうに糖しは附たる也

返して早きゆる乃刀持 来

弟の豆は袋をよしたる人の附にしてそは袋をよし

人の馬のほ供人とききも附也

つりちり 花のふ 水こほり 兆

は附を近附との光者の人か生遠て人を附る附方をいふ二  
句の言外にもほるをよけんを調布があらひるをいふ  
たるさゆらあるをいふ句も一六重と一七といふ句も一六重  
のりも一六重とやと海にうぬるは好るにあらはれをいふ  
るも一六重といふ句も一六重にうぬるは好るにあらはれをいふ  
たり按るにこれいふ句も一六重のあらはれをいふ句も一六重  
るもの方勝るをいふ句も一六重の附向は東風々に蕃花のいふをいふ  
り一六重又深川蕃花に蕃花をいふ句も一六重のいふをいふ

戸障子もむしりか丁ひのきまを敷 蕉

茶の場は見えし

らんさやうりやうりいつろ色つく 来

上登登の場の延乃附也テシヤウマモリ トヤガエハ蕃椒の俗名の色付  
ハ秋也

こりくくとそ子鞋を作る月おけ 兆

お向ハ素足夏の畠に植ふる唐辛子をいふと家にハ坊を  
体植う恒根際一二本植うととてつるを夏の中間をいふ

いふたきき

蚕とあるひふ起——初秋 蕉

是亦連ひ吟こゝの草鞋を化り居る月おきしに用字  
の蚕がひひが裸にまうて蚕をぬき字ぬえ又待も起る  
人いふいと裸にまうて振ひたるやこもくとさるる餘  
情有りぬき

その中よりみころひ落る 升落 来

お句よみおき場のと生しにしてかけるとおに花はから  
にこひひ落るといふ酒家の風流なり

おのこて蓋のあきぬ 半櫃 兆

其の場乃延きと

字菴ふ 誓く 居る 赤やま 蕉

そのま櫃の何の家ハ一所不往の世控人の字菴と人の親  
にして又一句を丸流に傳りたる也

いのち 婿——ま 櫃 集のま 来

去来抄日おハ和歌の奥義を去らす西行と付たり先師  
云菴と西行能因の境界と云らるるなりこれと連に西

行と付んハ手筒をくんだ付を附へーと述へーのひめ  
いふ身西行能因の傍あふんと云々草庵の人を定めたる  
附にしへひろく西行能因をどのくんや何も毎くやと興  
ある面を附るる祖公附合幽玄の場にしへ一人に人を定  
められん人の西行も能因も定むゆき六心くは何のゆきと  
その付にて附よと教へるふ而後学のよの沉思しへ味あゆ  
述にその人を生して附るるも六死物にまうて流の付お窮座之  
付つて附る付ハ子差美別たり家よ死活の付向といふるに  
にしへ一句空寂屋る付ハ一巻の調子そのふらけ方一の終  
たる也ー初心の心は遠い何のゆきれはよく工夫して祖公  
の俳翁を擧ぐるゆきー先事西行の付しと定て鎌倉より

撰集の抄傳とすてのぢうんも付ん又ハ言聖山に在いせー時  
子載集の色くびりもとすて後成郷へつてハ一なる付ん又  
撰集抄のよし面とりてたーふ西行を極むる説ゆれも  
ハ祖翁のぢうーく西行のひ又ハ言ぢきぬおんと思はる論に  
しへ蕉門の俳諧を学する人のしふるる説に何れ既に  
去来といふも如く西行能因の傍あふんと教へるるゆき  
肝要たるゆきー別に蛇足の説を設る及んた

ウ  
さうまーしふ口うりーとる 意とーと 兆

命婦ーさういふ人の愛化すて家ハ西行能因の付に何  
ら色好なる女官をどの老の果と其の向をあふしたる



附し前句に後句人を定ぬハ附句の變化をさすなりと云く  
いふ程も面をハ先年よりさす也

浮世の果と皆小町あり

蕉

二句一意味ありて前の人の上之代附親恵の句に上之向上の作  
小町と人を定ぬるも皆の字に廣く傷く妙境の境  
其角の雑談集よりある意と句に百ある中又その  
と云句と一思の字が心を極くれたるよと自撰の句に積  
るの句仙におうらるる意と一と云句は祖海の句と附られ  
一と云く自悔の句と云く其角の句の句はよ  
ハよれと死物も其前より改るる也

家に在る粥するかも涙くら 来

前の人のうち歎くをみと附て側乃人よりいさめさみに句他  
たる之浮世の果ハ小町ありの句を思ひ取て其外さめくの句を  
改する人も其の句に程あることいさめさみに粥と  
字にすげなす表を含める句作りしと云く也

市海こそとあれハ廣き板敷 兆

市の粥する味と云く市と云く其の風情を變化して市  
さすとも市ハ味と云く附たる也初陳の句もさすとも市と云  
く味と云く

手此ひりに風這す。花のうけ 蕉

はあきりに残りたる普代歌文と附するにて板敷といふより  
とよき一たるよて凡下のまゝを附て一句のよつはに凡界をの  
くまれば姿西落の坊除人の及子屋うまゝとて深き法衣  
市多きといふ西をを履して他にかゝる人のあきさみ風をを  
福るにてよきまいたる空山小風といはるまゝの意思ありて一室  
ハ空屋まゝ懸て一ものひら小這せると化りて一四例の能揚  
にしくよつはの好まといふありてひなるにて凡界にしく言  
といふ西落を西落をを附するといふ言句ハ言す。字  
に魂のまをいふ

かすこころめ五五の祿むらゝ 来

二句一表の附にして風這す。のをも角を。既を祿むらゝといふ  
はるまゝつは

凡兆 十二 芭蕉 十二 去来 十二

灰汁桶の重下やこりりまゝのくは 凡兆

灰汁桶と、同類の道具を思ひ考へて又蟋蟀キリクムス鳴て懶婦モラクサラン  
に彷彿イソツムキをすゑしむるといふ意をも思ひ合せられて灰  
汁桶と、身帯のいとまゝを思ひ合せるなる趣一扱二句

のうらまのいとあまに用ひたる所けし梅よ春のたきし喜人まづ  
ありてその喜も止まらざるはさうくもあまの生一たる兆の清を具  
閑寂をたのむ情言外にす

あゆかきうて 正月 森さる 秋 芭蕉

打依の附中一てあの人を森とがすうお林一まさあを打依  
たるこ正月森一と人と附て油のかきうたるこは梅様のもつ油  
ことさる梅一は梅様の念に梅情十分に行るる一酒かき  
てとハ油のかせらるるに一酒カスの字もあやまハ油のかせ  
付るに梅影暗くありてを人かしく森とがすうたるこは梅  
句の梅情を梅うて寂莫く梅様言外に思ひやうるこは梅

てとつて油をかきひて灯と消して森たるこは梅の思ひ  
又かきうるハかきうるの省法にして梅の字の義は人の物と邊  
取るの意にしてけり意ハ又まうるハ又かきうるこは梅  
かきうてとハと森とあまかきうるこは梅の意に梅は  
又にはかきうる梅一は向百人が九十人ハかきうると説人  
祖海冥行脚の時奈須の桃翠亭小の哥仙に日中の梅つ  
はに梅まうるこは向にむと釜かきうる美濃の蒸タガ長と附るけ  
かきうると家のかきうると同義の酒カスの字と心得

新あまあきうたる 月うけふ 野水

この坊一将の附にして眼の梅景より梅一葉をこきうる

子前の浦を彩は毛と見生して新世帯の若夫婦をよの底意  
もつるぬくや灯火の晴きより月影のうつりよる...

あゝへて嫉し十乃さうつる 去来

壺に新毛ひくるときめ附るるこはくも新世帯をよ  
きくしたるはさるるがきし夜儀をどの客もわけこえて引  
盆の舟を附て客の掛ひくも挿様を附たることするし

子代経 盆は物を様し子日 蕉

宴に六あゝの酒宴を子の日々宴と定て附るるこ子代ふるる  
物とハ小松を指てワヤ山菜葉にこふ代ふこふのささるる  
つらむも君うよまひをきんものうハけ歌をどう思ひ  
きて句化せられたるを一句の取まハ一向上のまつあし

さるるききにたひく 一を 降る 兆

景色の附にしつお妻のきりのゆかたをひくある室の障子  
たるさみえたひく雪とハかひひくをこしゆきにて詩に片々とい  
ふるまよ同一きひくこと降るるをりお妻のをまひるこ

真不出一一 肱小除る十女 豹 来

雪の降るに豹のいさくまよ景色の附る或説に豹とふハ  
つらむに肱にけりまるといふハ馬と書換る轉といふるまにまふ

摩耶 耶らるる根ふまむらるる

水

摩耶山六攝州兔原郡畑原村にあり摩耶山切利天上寺一佛母  
山と名く観音の霊場にして法道仙人天竺より来朝して建立  
昔攝州第一の名刹なりと云傳ふ二月初午を以て詣日と一諸  
人群をふす此日近頃の人飼馬の無愁を祈るとて馬を牽ヒキて糸ヒせ  
土産に昆布を調へ賜る是を摩耶昆布と云釣にさきうなる味  
ゆり又雪の降る景色を精しる傳とる熱し又傳やま  
形の入江に釣とめて此のう根のむをさるる釣まどの傳あり

ゆふめーにうますこ喰へハ風薫

兆

摩耶山ふ雪のかりたるハゆふめーのほくと傳ふる夕暮の押保も  
何のゆりや摩耶山ゆふめーの雪とて雪の摩耶と見ゆるゆふめー  
ハ東哉かてかますといふ魚のゆふめー風薫るハ其季にハ一向の風  
四一ゆふめー魚に風薫るとせー田家の用惟にすむる

蛭の口さふとろさて気味よこ

蕉

ふの田家の用惟と牛と夕飯喰ひて休む時ふまの田  
家家に蟻に吸れらるるの痒きを一向の西風に傳ふる

ふの田家ゆふめーを忘きて休む日ハ水

ふの夕暮ゆふめーを精して蛭の口さふをかき居るハゆふめー

も志とて安用と休るある日のふりにてそつりくるといふ所也

近せきしき殿より ぬふき 来

その思を志れてしつみ人の舊中武士にて殿の内意に叶ひ  
何れも彼よりつれをたあめといふは側きつ人の人として  
たあくの非書にて私情は休るを例の古意に入て非書  
にてもはるく人と附する人の知りかといふ意の詞を更てふと  
しつと志をりしつたることをいふ

金澤と人よはるく 才のやとさ 蕉

その殿の元に入め人の金澤と仇名呼んでる派好の積子者  
こととて人によはるく才のやとさといふ附たること

阿の風呂すまは 五月 北

前の人の用舟しつ阿の湯好くと附たるえ毎折入湯すとい  
いふ句作にしつ月に子細き

所内の秋も更け ぬや 来

茶の風呂場より月影かえ海しつ阿を殿のす毎一掃の附と

何を見るおも 一せあさうりあり 水

秋も更けに阿を殿の茶茶二句一巻にして何を見るおもと茶と附

たるこ

花とちるの西念の衣着

古注の西念の法然上人の弟子に罪有りて刑せらる。又一書に例の観念の体之世の中は何を以てても只曇らざるを以て何れも曇らざるを以てするまじりのものなり。心よきて西念と附する。此の句本曾の辭著しやえたる。又近江乃注に云はれり。と云ふ。此の書を觀し、あひてちる。花の觀念之西行上人と云ふ。相院上北面。武の達人俗名憲清といふ。世路をたまためを悟り、保延三年八月家生して北山西念のりといひ、別墅時に年二十と云ふ。西念寺ハ行基の開基。今ハ專念の僧ふきと守る。西念寺に在り。時

梅さかりたる。家宿にうきも人と打よあそよき。前句はやはりといふ。を八月に取。八月に白露のまじり。を。と云ふ。ハ二十三西念の衣着といふ。西念の衣体をうきむるの義。され。西行ある事。眼義。本曾の確證に表もれ。つと。ハ西行の寂をす。具。原木曾路の記に曰。大井大久寺の。間。西行の墓あり。西行坂といふ。確證。ハ一句の。九合。にて。本曾といふ。む。の。挿。様。之。西念ハ法然上人の弟子。より。何を。附。句。の。と。こ。ひ。と。い。す。西念の名ハ世上に。い。は。れ。る。の。を。か。く。取。を。う。た。る。注。者。の。心。い。く。此。を。東。云。ハ。西念の名書。籍。ハ。あ。ら。う。き。た。る。を。う。り。も。七。八。人。の。り。以上。新注。已上三註。取。捨。人。の。意。に。あ。る。處。ハ。予。ハ。今。姑。ハ。手。探。集。の。法。法。の。注。に。説。たる。如。く。意。得。た。れ。と。人。ハ。い。は。遠。ひ。た。る。也。ハ。老。俳。の。注。ハ。任。を。て。た。ま。は。り。

口を閉ぢぬと舌をうりこいするより附生して花をちる身は西  
念う衣を着るとは向上の身は後彼と人を定めんより二句の言外  
を味へて祖翁の能賜優美を感す趣一親老の二句一息を

木曾の 酢 荳ふ春もくれつ 兆

前句の西念と云生る人の木曾の山中に引籠たる人をいばやと  
揮りて附る句にして底意中々西行菟好の行をにらむやや  
お句のむとちる身は黒土保の衣着て西方を念すものこと觀老  
の一句むとちる身は味ふ身若くして後をせしむる  
羨中とあるは羨まき身の別敷の及すものむとちる身は解す  
おふまを法然の父子の西行のおまはるしといふおめれ又西念の衣保

つと西行の師の坊の衣鉢を名とるをいば一句の身はつばと味  
ふ身の癖見んとするは禪意を以て解す時の觀老のうらや  
秋門に志してやるとはよのむと花とく之世縁をいふおまを  
親一と生家するをちる身はよのむと花とく之世縁をいふ  
て祖翁の凡雅をほすするをいふ西念とたうに人名にすする  
蕉は雨の蕉着たるをいふ深く味ふゆへに向上の癖をいふ紙筆に  
るる一と給一酢荳六下学集飲食門に蒸餾スイグキト見分  
りつけたるものみせし制衣まはる新注に青菜に酒酢を  
加て二十日をぬきす納豆のまを白み引てぬきし生るを解  
の上は是てうらふ木曾福島のたぐい嶽山の辺にすするもの  
方俗スニキと唱ふすいふは女昂をいふ語砂石佳木也







茶の味飲りしとゆふを交て人と連絡する句作にして、  
赤松のみの子にしてその味飲の何より清水の掻掻く  
る聲し、其のこもら田にもみとかけ又つらみも  
ふもる、秋も交りまたにたゆ人も思ひ生れす、  
赤松のほみほみもつらみもす、  
すえり

うそつきに自惚いをもて好ふらん 水

茶の味もぶの味を井戸の水と見て井戸のうらみ  
にしてまじりせんといふに、  
らして自惚するをうそつと知し、  
茶の味もぶの味を井戸の水と見て井戸のうらみ  
にしてまじりせんといふに、  
らして自惚するをうそつと知し、

又も大なる鮎ととれ 生 茶

茶の味もぶの味を井戸の水と見て井戸のうらみ  
にしてまじりせんといふに、  
らして自惚するをうそつと知し、

境より田のまきやまきいささよな 非

茶の味もぶの味を井戸の水と見て井戸のうらみ  
にしてまじりせんといふに、  
らして自惚するをうそつと知し、

加茂乃、ヤー、あ、能き社、あ、蕉

二句一巻の附にしてその場を加茂の所田と定たる附は  
延す、  
蕉







餞し加東武行

梅の菜まよりこけ者のところ 汁 芭蕉

類書の通り大津の乙州う東武へ旅立は餞めの句に―こたす  
うの景物梅も若菜もあて鞠子の荷の名おのころけも何ん  
と由ひやうたる風舟のこつほふよ海風の景おハ五十三次河の  
おとさるる電りてマヤの句作りにて―景おハ梅も若菜に―お  
柳も梅も何れもあるゆゑ名おハところけをみと―何れも  
あ―と除情十分にすへてたの風流さ―とらふ心こり  
あ―と又らけとハ俳諧のおう―と一句の風姿最上のまひの  
に―と實は俳諧の現力ありとすあゆ―け句三行おとらふ

前にも読める如く自然の場中にて梅の菜草者類けく三物一  
句たりとらるるまよこけおとらふ中らるる一句を著せり切字の論を  
まゝいづるをいづるを付箋す也

かさあゝ―とさあ け 曙 し 加

打依の腕より―と旅行乃安を添もこころあ―と妻の曙とよ  
るの清女もまらふより起りてそなはれ川百首六首秋合をこふと決の曙と  
いふ題をまきれり―と外はあ―とあまのい―と妻の曙とよ

やまはまゝく小田おおりのけもれ や 珍碩

あまより―と精乃場の中―とや雀を曙の景色おとらふ







の俳諧を説きまされ

内花頭とよ 呼あひ くれ

刀加

お對の向にして若の教心の初に就くはより思ひきて俗稱を呼  
かたなるもつ偽詩ぞう伊又あゝるゝと思ひて西を附するもよ  
際とくゝと味ぞ一はよつ偽祖翁の俳腸たる近頃の注書に初  
又誠るゝハ則も明う侍ちるゝ必定こそ後又、酒念の思ひよ下向  
その附不破の關かゝるをも長明の記より室然極るゝその記の  
つゝ原親行の紀行にて  
界も親行を考へ世もその記と申すは、酒念の海に記も偽作を明  
と翻はせぬるゝも酒念下向のゝ東鑑の教念に喝するもよ一  
下向しゝゝハねえあ 二度酒念の思ひよ下向するもよハ教心の  
なハ未詳 二度酒念の思ひよ下向するもよハ教心の思ひ  
み越るゝをよ入るゝり次の作者も明うそのよを附する時らよ

筒心こそをよにうゝゝゝに附するゝ連歌の思ひよ又類聚国史を引  
加茂祭主永權内蔵頭に侍するもよとつゝも明うそのよを引  
内花頭とよの思ひの得は神の思ひとつゝも明うそのよを引  
もよ思ひよめめくつめとつゝも明うそのよを引  
の妾赤りゝと影押身の時と西行の思ひよを引  
返るゝ思ひよめめくつめとつゝも明うそのよを引  
長明ハ菊太夫と稱し法名蓮瀧と号するもよ書表後にはゝゝ水口歌善  
福寺ハモ明教心の寺也

邦の刻の真子小並始小西方

破

幕の内花頭とよの思ひよを引

附に一耕の心牛も茶の抄採すからる角一箕手八神法  
に箕陳キゲンとつる備はつりてまのよと後へ一或人いりてされど箕  
陣ヤイニテハ星宿の箕尾キビの如くつたる陣立りて両方を強きてこの  
の形子似れを信よこのよと呼ぶとやされとやさうこのよと後  
死又ハ西方とハ西行長朝鮮軍をい侍る角一茶原小坂  
内海野ウチノノの如く池イへ未明の侍る角くや

すゝまゝの 松林の如くさうりりり 男

茶の曙の景色の附て軍陣の向を一耕する附方よく茶原小坂  
を止て集るや一すゝまゝの如く茶の原上すゝまゝに松の村  
に足ゆるさぬ茶原小坂を下に歩きたるはつたまゝの如く一茶原  
茶原にすゝまゝの心茶原の如く茶原の如く茶原の如く茶原の如く

茶の札すゝまの 札ふよまの 品

茶の原を茶原の茶原とて内小川にて十種茶を採りて茶原の  
茶の札茶の札と十種茶の札をいふ又採集抄巻六山原の茶入  
減の茶永曆の末八月の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の  
すゝまゝの茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の  
とやういふ茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の  
おいてありむすひて茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の  
おいてありむすひて茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の  
とやういふ茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の茶原の

蒼くくよる 百舌鳥の一舌 智月

蒼白もこの秋夜をれを付て有りたりしをありてその場の挿挿景色を  
附してまた木葉にひびくものありしをありてしりしを著す特山の志丹を  
蒼くくよる

懐ふ手とあゝむる 秋の月 凡兆

起懐しつてこの情を詠むる人の附してこゝろとあゝむるとやうに  
附するよりの句意

けいこくまふぬおの海つら 凡

變化の場にして月より蒼白して海原の句意したる内海の汐時  
満ちて定有り外海ハ汐の汐をり又流着き海灘まを内海と云  
戸内といふは九州地へけり外海といふは説し有り然るに  
あり今通俗から入海河を以て入より内を内海と云入り外  
海といふ通称之中秋をの汐は大ききとてまより三四日たぬうちハ汐  
定らぬ流焼面にては定らぬうちハ汐はかやまねハ秋の月といふは  
海上を附たるも有りハ汐をの汐はまき異ひある人もあるなりハ又ハ  
のかきめといふハ月のかきめといふは葉にして大小中のかきめを以て中秋十葉  
ハ汐の入かきめといふハ大かきめといふは中秋をの汐を初汐といふはまき  
はるなり初新のまき唐土錢塘江の潮も伍子胥の靈潮と云つて仲秋  
十五日に高漲ると言付する九と實ハ潮の入りなりにして地勢によつて然るなり



類とかなんか字眼といふてあつてもふ一書類とらひてうり等なるり  
驚きまゝ別れ生るまゝ也

大 臆おおひひらりまぬ恋をうて

残

伊智物語の付にて二句一意の附しや物語にむう一男こちの女  
とてろおひひらりまぬ恋をうて女京の人のあつてうりやうんせとに  
思へる心まゝなる相ひ女中しに意まじきまゝにうりまぬ恋をうて  
玉のをとてうり歌をうてむあひたりまぬ恋をうてにあらぬおひひら  
いたる福よりあつてまぬ恋をうておひひらりまぬ恋をうてあつて  
うりのすゝめおひひらりまぬ恋をうてうりまぬ恋の付にて大擧お  
ひひらりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋の付にて大擧おひひらり  
ハ素蚕の糸にまうて君うりに係りんとてうりまぬ恋の付にて大擧お  
おひひらりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋の付にて大擧おひひらり

小 刀の蛤又なる

残

若の女の刀ハぬれ紙のぬれまゝと打をけくまぬにて二句類

小 刀の蛤又なる

残

若のぬれまゝ人を特して若く大工の細工に刀を入ぬまぬを附して  
又職人を歌合にうりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋をうてあつて  
うりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋をうて  
歌の意より一特してうりまぬ恋をうておひひらりまぬ恋をうて

末更らんとて心は合て附と名一首の上六六二のくみして是句をうけ

桐子火しりも大年の萩園風

弟の征ユする人か大晦日の世話あか切もせぬ小刀を細いさす。  
とて大年のおは神棚に焼めをかげると附て大二十日の世  
話あを二句の言外はさするのよつは之家六六二と足る六つは

こもくハたりふ候も頂への浦 猿雄

変化弟の人の情に―て桐子神燈はくもも大年の萩の人情  
は神女あはるゑくと揮くおまの人かと変化―たりふ候と心  
にはまぬしかりとる句作に―て眞家の情たるあり又

源氏頂への巻の付もるゑくやあか桐子火もすくふハを大神  
さまの神燈をかげたと思ひきて候も取あまのみやけふのいせ  
より源氏の消息―て歌をよめるお付もるゑくされたり候  
といふ可よぬまへに候し

あひお合せも肩まぬ 残

弟の人の姿と足生一の附し

けなもこれめとくも 破 扇 風

二句一意の附に―て弟の人の用之不自由がちにあまを―破扇  
のかちめを紙捻ちとてやうとて持てる人と足生一

ナウ  
お百 油 祿 さ せ ぐ ち ぐ ー 月 足 る 雖

人の世文化に... 油を造る人として... 油を醸し造りて... 月足て... 油を造る人として

嘆 ち ぐ の 隣 ハ ち の ぐ 祿 ー ー 芳

嘆 ち ぐ の 隣 ハ ち の ぐ 祿 ー ー 芳  
先小月を... 油を造る人として... 油を醸し造りて... 月足て... 油を造る人として

流 ハ ー ー 小 ぼ と ー ぐ ち ち 風

内のお討の... 油を造る人として... 油を醸し造りて... 月足て... 油を造る人として

形 ち ぐ の 隣 ハ ち の ぐ 祿 ー ー 芳

又その用を... 油を造る人として... 油を醸し造りて... 月足て... 油を造る人として

う す ち ち ち ち ち ち 史 邦







意にあつたか、の古今集乃序まむに呼ぶ水は住らつたを  
やうふあつたか、むむむたのつろいろうがたことか、  
ホの意を以て中意として又漢文の体を斟酌して用ゆると  
心得てけ記を讀む、李許兩撰宇陀法師に云俳諧文章  
のりおよぶてか、  
あ、うつ不作五原氏撰衣の類皆く連歌の文法之故に先  
原一格を立て門人に傳へしん傳へみよるに書ちん人しりぬ  
當流の格式をよるべし片後つてさるる多し、序記賦說解  
箴辭まどす、  
にあり傳へし、依名しもの、  
賦說解箴辭諷文の十作も祖翁始て一格を立て門人に教

あふにて古来仮名文又右の十作の少はあり、只生名仮名のあ文  
の体をまどて狂文を遁れて別に蕉門俳諧の文章一格とする  
抑、又鄙言と能言との差別あり野にして凡を遁るる時鄙  
しとす、  
よもあ、  
露亦如電應作如是觀、  
骨子のみ、  
め、  
為圓居曰菴、  
々分別記、  
の一通、

小生といへり賦は支考文操に生じ奥の細き草芥孤抄芭蕉の  
傳に元禄三年の夏石山のをくよ幻住菴にむすば口年と申す家  
まはるは川嵯峨日記なりといへる疑ふ事一今按るに元禄  
三年の夏の始より其年の初冬の迄を位ふある事一例の十  
日ももろほる所にて又て我胸の中を及祖神のさながら  
ちりて神なりといへる昔より書残る事一久しく止りぬる事一  
も何れに幻住菴キイワ凡右日記ハ門人の書音或ハ各々尋訪ヒシハクセー  
時の發句を記したるも其中ハ冬の句更にありいふれをて今  
三月書音の絶へるや又訪ねしどもせざりしや又明年弥生  
尋ヒシ旧菴といへる花ヒシ菴の句にてもさる事一け明年といへる  
とも位より翌年の夏よりして元禄四年たる事一疑ありいふれ  
此集撰四年初夏に成て仲夏は本草跋を書きし事一四年と位りし  
にハ花ヒシ菴の句に五年の春の句もあらんぞ跋後の撰入しつる  
何れんや又膳所へ行人ヒシの祭ヒシをよまよ川田の事ヒシもあ  
元禄四年の早春乃かたし幻住菴をてて来よといへる事一  
ハナミをたす

石山の奥岩間乃うろふ山を國分山と云  
了れりしを寺に名付ふある事一

石山ハ江州瀬田の南にうろふ國分山の川田より石山を尤に云ふれり  
一里計のあり石山の事一しる事一岩間ハ岩間山正法寺といふ元禄  
の朝に越へ泰澄建立す本尊千手觀音ハ西國順禮牙十二番の巡

拜不<sup>レ</sup><sup>レ</sup>岩間寺と云是<sup>レ</sup><sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て  
 文字に<sup>レ</sup>往昔の字を用<sup>レ</sup>ゆ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>處<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>て  
 今<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>国<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>稱<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>とい<sup>レ</sup>へ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>義<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>国<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>寺<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>聖<sup>レ</sup>武<sup>レ</sup>帝<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>草  
 創<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>六十<sup>レ</sup>餘<sup>レ</sup>州<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>建<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>今<sup>レ</sup>江<sup>レ</sup>州<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>国<sup>レ</sup>分<sup>レ</sup>寺<sup>レ</sup>額<sup>レ</sup>癢<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>名  
 の<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>本<sup>レ</sup>尊<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>藥<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>佛<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>村<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>保<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>藥<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>  
 林<sup>レ</sup>藤<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>細<sup>レ</sup>さ<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>渡<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>羽<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>微<sup>レ</sup>小<sup>レ</sup>登<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>曲<sup>レ</sup>二  
 百<sup>レ</sup>歩<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>幡<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>せ<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>ふ

翠微<sup>ト</sup>ハ山の異稱<sup>ナリ</sup>と云<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>山の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>氣<sup>レ</sup>青<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>黒<sup>レ</sup>色<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>山の<sup>レ</sup>半<sup>レ</sup>腹<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>再<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>翠<sup>レ</sup>微<sup>レ</sup>疏<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>謂<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>頂<sup>レ</sup>上<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>傍<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>陀<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>處<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>山<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>翠<sup>レ</sup>微<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>半<sup>レ</sup>腹<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ふ

二百<sup>歩</sup>の<sup>レ</sup>程<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>幡<sup>レ</sup>宮<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>社<sup>レ</sup>なり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>八<sup>幡</sup>宮<sup>ハ</sup>人<sup>王</sup>十<sup>六</sup>代<sup>應</sup>神<sup>天</sup>皇<sup>に</sup>て<sup>お</sup>か<sup>り</sup>し<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>云<sup>ふ</sup>此<sup>ニ</sup>社<sup>次</sup>云<sup>ふ</sup>八<sup>幡</sup>三<sup>所</sup>應<sup>神</sup>天<sup>皇</sup>神<sup>功</sup>皇后<sup>玉</sup>依<sup>姬</sup>貞<sup>觀</sup>元<sup>年</sup>九<sup>月</sup>十<sup>九</sup>日<sup>行</sup>教<sup>和</sup>尚<sup>於</sup>男<sup>山</sup>峯<sup>建</sup>立<sup>ス</sup>と<sup>云</sup>ふ<sup>後</sup>諸<sup>公</sup>祭<sup>る</sup>不<sup>多</sup>し<sup>ハ</sup>幡<sup>宮</sup>ハ<sup>国</sup>分<sup>村</sup>の<sup>鎮</sup>守<sup>に</sup>し<sup>て</sup>近<sup>津</sup>尾<sup>八</sup>幡<sup>宮</sup>

神<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>陀<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>孫<sup>レ</sup>像<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>唯<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>カ<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>甚<sup>レ</sup>  
 忌<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>或<sup>レ</sup>部<sup>レ</sup>光<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>わ<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>益<sup>レ</sup>ハ<sup>レ</sup>甚<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>  
 う<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>

諸<sup>神</sup>鎮<sup>坐</sup>之<sup>記</sup>云<sup>山</sup>王<sup>ノ</sup>社<sup>之</sup>聖<sup>天</sup>子<sup>者</sup>八<sup>幡</sup>大<sup>菩</sup>薩<sup>也</sup>至<sup>本</sup>地<sup>所</sup>開<sup>陀</sup>如<sup>來</sup>也<sup>唯</sup>一<sup>ノ</sup>名<sup>ハ</sup>唯<sup>一</sup>神<sup>道</sup>の<sup>社</sup>職<sup>ノ</sup>名<sup>ト</sup>い<sup>ふ</sup>る<sup>也</sup>唯<sup>一</sup>神<sup>道</sup>

日本正統の神道にして佛法を甚忌るる日本は別教なき事  
 是の教門の徒弟の姿風やして伊勢大神宮に於て行はる  
 ことありしに延喜式齋宮忌詞内七言佛稱中子一云左經稱  
 深紙塔稱阿良々伎寺稱瓦葺僧稱髮長尼稱女髮長  
 齋稱片膳又外の七言といふはりし物も如く神乃ま忌  
 事いふ事も如くは空海最澄の徒入唐帰朝の後以佛混神混交  
 無差別齋跡と稱して表は神と現し本地と稱して裏は佛とて  
 神佛を混て表裏陰陽を以て説を設けたるを亦邪神道といふは  
 仙夢に神とていふはして日本を度しおふこと立説すされは佛は本俤  
 實地といふ意なきなり一なるは邪光とわけ利益の甚きと同一  
 事なり又きしとてかきしとて老子經和其光同其塵とて文を  
 一作して形は別いれたるを和光同塵は結縁の姿こと誑曲なる説  
 不又きしといふは元生は結縁の爲しといふ事又佛法附  
 會神道以胎金兩部配于陰陽以佛神為同一體者兩部習  
 合と云ふは密教の胎藏界金剛界の兩部を神の道に習合し  
 ことを又日本神道三種あり一曰唯一宗源二曰兩部習合三曰本跡縁  
 起と云ふ唯一といふは亦部ありての後の名なりと云ふなり

日以八人の詣さるればいと神さむおきつるな  
 教傳は住まてし學の戸あり根無新  
 とくまに屋多りり燈花て狐狸姉とて得  
 くり幻住菴と云

源氏蓬生の巻は元より荒たり一巻の内いふ狐のすゝと成  
てうと誦しうといふをよめ一精作又西行上人の歌にこれや  
と一考すも人語ありむ蓬生もあは月のかきさる又叢心集  
よつとこれのち化ちれはすむすひさうにありひ他人の拙  
ふとありありひハ風は破れ目にとちぬま是の趣も思ひ合せ  
狐狸ゆゝとをあらうといふ蓬生の一精ハ勿論高寺の朝の擗き  
はまられてあまき狐のふしと云かま後京極  
攝政人すまうといふ者  
あまき寺の狸のふしやつてうち々叔蓮  
法師歌をよむ通ひ  
てより血のりてや日ハハよりより登根り登根りていふ  
支那自然小破屋のさびしきものさる味もあし神もいふと非  
きさるるとに同じ宮が宮が東が東が東の類不同といふは  
さうて夫利の反備をいふもさびしきものさる語送考にさるり

あまき僧何うハ勇士菅沼氏曲水子乃伯  
父あまき伝りて今もハ年計むるに  
りて正身幻住老人の名とのこ残せし

菅沼氏曲水子の膳所侯の家士通稱を外記と云幻住老人は同  
侯の長臣本多八郎左衛門尉探山居士号も天和年中六十  
有餘歳にして卒すと云傳正正ハ年計むるにさるり  
當然といふもさる

予又市中とさるるも十年計むるに五十年也

ちのこゝろハ慕出れみの成失ひ蝸牛ハ家ヲ離  
ちて

市中をさぐるハ世路をいふる俗態をのぞき去りの義之助祖翁  
甲七茶乞ふ事五年やちのこゝろ以上の十年ハとて讀  
下の五十年ハ音にて讀る一とて讀るハ文章語路との下に下  
文にがいへるといふハ閑寂を好む山野に松をかきさんとい  
てハ心多病才人ハ倦て世をいひ一ハ人似たりといふハ家  
の市中をさぐるといふハ照一合せてなる勢一其志の高さを  
とるをさぐるハ慕出のみを失ひハ古歌に「みの虫のちも失ひ  
自らおを父よ母よと唱り一なる又ハみの出入りする本のまゝなる

ててはくはくともたき秋の葉の乳仲正ハ木をほみくハ蝸牛のち  
ハ丈木集に「家とすこぬ心におち一かたつみをまきくハ一とあり  
世なれハ古歌に「よれハとちハとちハ自然に上達のこゝろハ  
詩歌連係同一軌なる也

眞羽象浮の暑于日は面成ころ一高きまこ  
あゆまろ一水海乃荒磯をさすを破り

眞羽象浮ハ長洲羽州といふハもろハ眞羽の象浮ハとハ  
文章をなまげりハ陸奥の風を分て生羽とせハなまきハ和銅五年  
ヲ割テ 眞の生羽ハ作意にハ家ハ塊噴簿がさにならぬハつゆ  
出羽ハ祖翁拙志辨に橋町といふ処に冬籠一てむつきハとらまにあらぬ



け文作と海へ高きまをらむと句を切て讀ゆ〜  
あやめ〜  
川け〜  
祖宗一風の文章と味も妙〜  
とらぬ〜  
光俊〜  
一何あ〜

々歳湖水の波も漂<sup>タラシ</sup>の浮葉も流〜  
草か一草乃陰もあ〜

近江の湖水（三木）の海〜  
舞とい〜  
す〜  
建春門院の殿上の歌合に於て改水も近馴〜  
の〜  
からに〜  
き〜  
あ〜  
は〜  
か〜  
の〜  
江州湖水に〜

俗よかいつやうと云ふは津名六鷗鷗一名水胡盧

刺端茨あゝもを垣子結係あはくお月おおい  
とろりゆめに入一山乃やうて生一とさくおんそ  
こぬ

茨の字彙以茅覆屋也と云ふりぬきく讀ぬ一西行山家集  
一山乃やうて生一とさくおんそと云ふは拾玉  
よたれうちうと云ふ世をすく集のたをやとおれと思ふやと云ふ

さくろふ茨の名海と遠くくくく一山乃  
山家集と海一とさくおんそと云ふは拾玉

うーうの便さくおを木つとこのはいおんといは  
あーとくろふ鳥ーと

うーうの便さくおを木つとこのはいおんといは  
一春の名海と遠くくくくお月のおい一をよぐ一山家松よかま  
て何をもふ方丈記お茨の海浪をこもはあおの如くにして西の方  
白ふなはけをもとすのくくくお海よとてその山を繋るも又狭お  
あは松よとのおおれは咲りてきて行旅をいふは是等お松よ酒よ  
にや宿うーもハ山家集の歌を引て書くといふ説有り又檀鳥北  
るゆーと宿よかかるといふこといへり予ハ風俗文選に燕とい  
ふるは宿よ啄木鳥ハ俗傳に守屋大連と云ふはとありて佛圖を



とてふゆゑに真名文侍あるに魂家薫風の下よハの字を省てかた  
語路を急ゆす。の文法之学少者心を引ひて會得もあらず

日枝の山以良町を根より岸崎乃松ハ  
こめて城を構ゆ約々々一舟り里ハ  
かすよ木樵のあり林麓の小田乃早苗  
の河原も七うふ夕乃空乃水鷲若  
美景物としてあつたる事す

日枝ハ傳教大師延暦帝の勅を奉りて山を向く敷慮ハ以まの儀  
を以て比叡山と改りしと云んは景物をかきふる文ハ少く  
崎の松人のあつた城ハ膳所と云橋ハ執事と云け橋ハ志賀郡と

栗木郡の境にハ長九十七間幅七間ハ小橋長九十七間幅四  
間中島の間十五間合せて百九十六間ハ長橋と云取ハ山城の  
下計西之末木集西行法師の山ハ  
小田乃早苗ハ山城集にハ  
されて山田の子苗に由りしと云の侍  
小田乃早苗ハ山城集にハ  
さめたりしと云ハ山城集にハ  
る必地ハ山城集にハ  
ると云ハ文選謝靈運詩序云天下良辰美景賞心樂事四者難

申す之上山の土等の傍りかよひて武蔵野の  
古き栖もありといへる色田上山も古人を

中よりハナシ凡そ糸の伴中もくつ小義之土安年ハ富士山の事と云之三  
上山ハ富士山の形に似たり一名百足山又近よつて傍似通ひて云之

判りしる事ハ根通し傍をちかくこかの山ハ野の事堯孝ハ  
法師  
富士に似しより武蔵野の古きすもといへる深川の芭蕉を  
よつて聊々を暮らにありい出とくし小意之も旧菴を思ふより  
又古人をきくし思ふ心を起せしことかよひ古人をきくは方  
丈記粟津系を分て雫丸が依を尋ひ田上川を流して積丸

まよふ皇をたづぬ又そ名柄にたかしの下にそづつとくしおたりてそ  
こは積丸を文の墓なりそ境の境してその巻ハ書のをしれんそ  
なまよふより又志賀山の下正覚寺村よりありの宮とをたきそ  
貫也を祭りたるこよにむきふふよやれる月影のあるそ  
の世よそそたりそ歌よつて名柄しとかやそ社のかすり  
黒主の社在志賀の黒主と号すそ又田上山の下は俊頼の古  
跡よりそ等れんそかそよとハ云あるゆへ水源寂室  
和尚の偈頌五更起坐聴松風等故人来半作空く作らぬ意よ  
も通ひてすそ江湖集故人ハ知己と云こ只古人のそとけまお明れ

さくちり獄子たうそ袴腰つふ山を黒津の

里のいゝと後子茂りて 綱代さよふとよみま  
ん茶の茶集の娘女ちりりり

さよふたけいさぬたけのるん名寄に田上の子ぬのたけもさ  
るめしちやまぬぬのふまふしぬら茶 後茶 小竹生とかくぬわの  
通持りて土人の称さるぬら茶のさけさぬたけ  
幻住庵より東の方田上山のほろま子大茶集のうたをさす 坪の  
ふらふらて願うさぬさぬは腰のささぬぬより一里計南の方にて  
勢田川より西の方ふ秀りて田のさす津の近江甲斐郡より田上山  
の禁之石山より湖水を登たて向ふさぬの里のいゝとよみま  
りていゝの茶集もさぬと思ふ名寄もさぬぬのさよふとよみま

いゝとよみまの里もあれにさぬぬ 後重つらぬぬと田のさよふ茶集もさぬぬ  
のさす牡丹いゝとよみまに茶集もさぬぬ三杯本茶集もさぬぬ近江のいゝ  
りより来る附宇治河辺もさぬぬ歌を化す一首もかへりていゝとよみま  
ぬら八十氏河のちち本もいゝとよみま浪乃のさすさぬぬとつらぬぬ  
さぬぬいゝとよみま歌もさぬぬ思ふさぬぬ文の詞もさぬぬの詞もさぬぬ  
いゝとよみまいゝとよみまさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬ  
さぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬ  
又たさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬ  
いゝとよみま茶集のいゝとよみまさぬぬの一作もさぬぬさぬぬさぬぬ  
いゝとよみま歌もさぬぬいゝとよみまさぬぬのさぬぬさぬぬさぬぬ  
巻のりりいゝとよみまさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬさぬぬ







宗甫君芳名ふあまびーより西行の旧菴をわうーかりて茶入紙つり  
そのあまに録してあめしうしの歌をよみあひるるとまふりーとこと  
の清水の名付了ーあまふー

くさ昔位人々殊ふ心さく位あり傳りて  
あまみあま物すまもあー持佛一間紙  
隔てあのおおまむーあまあまいさるる  
らうー

とんはちの上にとあまは月ーあまあま通る光將の字  
を月也殊よと格別よとあまあまとい意之昔住人といわ位人  
を云たくとあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

すはとん流紫言良山の僧正と加茂乃甲斐之  
うーう教子ふてけいふ洛水のほりいま  
あまあまあまあまあまあまあまあまあま  
あまを傳て幻住菴の三字を送る流紫  
孝菴乃記念とあまぬ

さるはた様よとあまあまといふあまあまの略語とあま  
あまは紫高良山は流後御井郡玉岳宮とて武内大臣を  
祭るとあま天台宗にー僧正諱ハ一如とあま加茂の相官藤木  
甲斐守敦直の子と敦直書法三跡と宗とてあま海法を傳ふ  
慶長寛永の間の人とも書法時輩よ超出とて名家とあま

出る者多し一子孫を書法を傳授して入木の一家ス世に甲斐  
流と稱す北向雲竹佐々木志津摩を門人とし他門人数百  
人顯る世にすもの多し略す嚴子ハ出所未詳孝経に嚴  
父嚴兄ハ兄より子字文也父に次リ君につくふいそ嚴と教  
といふ又系邦にて稱美の詞にいつくしといふされハハ  
子と讀るしと云説られた從ひがし一文勢語路漢音に讀れ  
ハ草をなきばミカ妻ミカ文字を作りて並列さハ何カハ定ミて而見  
たりて書きしとある也一いそかりとハ在イといふも額ハツ  
木に彫たり今江州台蘇の俳士于當亦持と云

す處て山居といひ旅寂と云ざる器也

ハふるふるもぬ一木曾ハ檜ヒ立哉乃若若  
斗枕の上乃植ふ也

さううつたくりゆるもち一ハ言のさしハ一なるをせよと云  
の辭語ゴもさまでそいゆるき道見たしと云し則ゆるさや  
何れたが木曾の檜立哉の若ふと云ふ文也

豆と稱しとゆふる人ふる心哉動一何れハ  
ちの箱里乃たのこた入来アといのさつた福  
らふあり兔の豆切りうよふなや家すき  
ぬ農談日既り山乃端ふかまとお吐す

ふ月夜待てハ新を侍トモひ

この心を初一お世ハあふとよる文勢語気妙境たり古文前集  
雲谷雜詠朱晦菴野人載酒未農談日已夕此意良已勤  
感歎情何極歸去莫頰來林深山路黑け詩句を取れ  
次唐詩に夜坐不厭江上月晝行不厭江上山といふ傍も  
何れあり

燈トモを取てハ罔モウ西リヤウ非シ成ヒ守シのウいハハと  
てハひハぬルふル閑カ寂シをハ好ム山ノ野ノ子ノ臨ミをか  
くハさハ舞ハとハハハハハ

莊子齊物論罔兩問景曰曩子行今子止曩子坐今  
子起云口義罔兩影邊之淡薄者云是即是非待彼  
之喻也ハひハぬルふル閑カ寂シをハ好ム山ノ野ノ子ノ臨ミをか  
俗ハふハむハむハにハなハむハいハるハ義ハ閑カ寂シハハもハのハおハはハまハるハハハまハるハ  
是より以下の文ハ才のつらなき成演る之家に祖公有清潔の俳  
腸を味ふなりその志のさるる生る文也

や病方人子倦て世といひ一人ふれり

やハ字又ハ動の字の義よりてなむもとれいさるるハ翁謙  
退キして信実の隱遁にハるるべし山妻と世といひ一人  
似ハるハるハりハふハハハ妙意あり





色より月の景色よりつる今家にありし捨てぬや  
さあられし七情の感動も終ふ夢<sup>だ</sup>の境界あり本末  
空なるもの時賢愚文質一物なる夢一されおのれ  
つらぬりよふ本末空なる時をさしめし味は

### 先多のむ桂木もなる木立

そは菴の傍は桂の大木ありしとまんよつてけつ西行上人家  
集よりかみみめて友をさめぬ小菴のねえにむ桂の下枝  
よまれ一趣をついての作とされたり一説は原氏物語推く  
の詞と歌とをついたるなりといふされし住居のさし  
みけとるのこゝ推くたつたさうなれと述懐の夢よ

しつさるも下の句のまに通ふありしと西上人の歌に思ひ捨てぬ  
しめとよみ得たりしと探るふおむらひの意も詞も通ふたつ  
山家集信仰の翁一世の作とてとやと記乃後句まれく  
く味つて俳諧文章の龜鑑<sup>キカ</sup>深妙の意趣考へ探るなり一歌は  
影決して祖翁を貶<sup>ク</sup>するなりと戒<sup>イマシム</sup>而已又萬葉集第七詠  
留<sup>留</sup>歌に片岡のけむつをよ持するも今年のなれおさうなり

### 題芭蕉翁國分山幻住菴記之後

何世無隱士以心隱為賢也何處無山川風景  
因人美也間讀芭蕉翁幻住菴記乃識其賢且  
知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相

得焉廼作鄙章一篇歌之曰

琵琶湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清

茅屋竹椽總數間

內有佳人獨養生

滿口錦繡輝山川

風景依稀入誹城

此地自古富勝覽

今日因君尚益榮

不祿庚午仲秋日

震軒具艸

元禄庚午の三年の翁の住庵に在りし年のもも震軒の丈艸の号  
ありしといふ事をも此明記を見れば又伊勢松坂の儒者龍尚舎晨  
風の号ありし事も人のいふ所も晨風の蕉公の知己にありし事  
也と云ふ事の時記の名を先きし所の事也といふ事ありし伊勢外宮祠  
官龍負の標す。伊勢名所拾遺集漢字の序に晨風と文に延宝年  
中の撰心又按ずるに易震為雷為龍云縁も因て龍尚舎の号も  
ありし也又丈艸の龍の固に在りし時ありし事ありし時ありし佛  
幻庵のいふ事ありし事也又丈艸漢字の跋に風狂野衲丈艸との事  
たる事ありし事記後の詩に震軒と云ふ事ありし事也又石川丈  
山の凡を慕ひて自ら丈艸と称せし事ありし詩草にありし丈艸と云  
ふ事ありし他日の考を俟る

凡右日記

以下幻住菴の日記より自ら書く  
くりやまの山より机の取つて以下は幻住菴  
に在りて白のこけり

時より宵中までや。林扉くね 曲水

ふか山の眼前即興よりてを考より上ふやとて山崎の  
まゝの空作にして峯より里つてはぼる杜宇乃山の林扉と  
るついで山より福むるま脊中の石つる尋常の空は尺五の  
時より一精の姿情山居向上の風情あるゆへ

く川ささる水路さつ。也ま乃山 野水

く川ささる水路さつ。也ま乃山 野水  
く川ささる水路さつ。也ま乃山 野水  
く川ささる水路さつ。也ま乃山 野水  
く川ささる水路さつ。也ま乃山 野水

怪もくく時々 怪なく 去来

幻住菴は曙の鳥鷄をまての作とてれありくみまの水鷄と  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら  
かよふ水鷄向にしてけおむらおまむらおまむらおまむら

海山小五月 可々 ぬや一く 凡兆

海山小五月 可々 ぬや一く 凡兆  
海山小五月 可々 ぬや一く 凡兆  
海山小五月 可々 ぬや一く 凡兆  
海山小五月 可々 ぬや一く 凡兆









のあつたに木をきり斧の音とむくふ人も掃くまはに二  
羽のうんこきにいあふん五羽の羽もけ層をとりまはにる  
にちや何もんおもお淋しの層りやと云意

木つゞきにつゞく鳴る水柱が 膳所 泥土

おは水鶏の淋しきまは啄木鳥の寐しとかがてふ  
まがう叩く音を取合せて渡して鳴ると云ふ一句のまは  
る

さあふの柱すくや風乃色 史那

記中よ書る木曾の檜さ越の葎葎計枕の上の柱身

舞いこむまはにさくまはふつと何ふぞおといふるま  
俗小あをまると云さ涼しや風の色と八翁の清を負まの隠  
たるる節の流を形容しと化れる以下涼しといふ句ま  
八翁の清潔の気性を餘情よまて云とす

月待や海と尻目ふ夕すく 正秀

五分山すりの眺を眼あの実景言外にさるるゆへに  
さふ世の場か

さくさく栗乃葉沈む清水丸 七人 柳陰

閑み舟の栖居かこく流る清水丸木の葉の沈むさみ静

閑の地実情見し一の句也

涼一さやともになをむ控らば 如行

清身身の閑寂と好む所言外より如行たよく尋訪せ  
たよそは清潔を悦ぶの意向外よりわかれたり米をむと  
つ所の句一実小居て虚は偏くの場持たば一幻住庵を動か

訪小留まきり

膳所

推の本とくくく啼や蝶のさき 朴水

訪小留の留守まてりりくるかひ向化りて逢ざるを歎け  
外よりすくくく已を憐れ居諭一てのみつはこ

目お下や身洗ぬ種り海涼一 市隠

美濃岳井

先亦湖水眺望の眼下より迎く海をさめり身洗ふ計小思  
形容一てよそのの味来る風殊は涼一とせ一句也

文ふ云ふす

膳所米や早苗のしけり夕涼 半残

膳所と古(お)の供一なる不ある也の名こかやされはたの  
が涼もさ一しよとて膳所米とてその土地の者ハ上米と云  
ふとあんといふもかとも句意ハ五分なり膳所乃向をえたらす風  
景をや物よ生る稲葉もさるさなりなむれをいさぐ早苗のしけ

計はまことに涼しく夕景色いとも涼しく也  
とありて伊賀のす強々許り文は云ふす句ありて定り  
さし何れぬる風景と云ふなるは播磨の田やとせしは播  
磨のうらぬるを播磨と云ふは播磨の早稲はわ花と  
さるる七月すのひといふまた伊賀の句といふれは  
て一句のよ除味なる

麦乃粉を土産す

一袋衣これや鳥羽田のこと〜麦 之道

麦の粉はさるる云ふは播磨の田を刈ぬて  
此のま〜ぬをさるる上すぬ吐をすて麦のひは  
はり〜地はつ〜と云ふは播磨の田を刈ぬて

い〜のこまあひ〜の〜我の歌を播〜一他〜  
ハ粉の之道土産す山陰紀伊郡鳥羽田の粉  
ま粉を土産す〜句の意は歌のまの粉と云ふ  
てるお田の〜と云ふは播磨の田を刈ぬて  
備〜と云ふは〜

書音

一 麦 乃 粉 山 陰 紀 伊 郡 鳥 羽 田 之 道 土 産 粉 也

長崎

魯町

書音といふは文の便なりと云ふは長崎の魯町より  
を思ひ出て〜と云ふは四月十五日を結算と〜七月







外又時やあけし秋の風をさきも色くけりてあまのこに楳のちとこ智  
月尼々田公入の西高橋より

石山やけりて果やし秋の風 羽紅

石山の石よりふりし秋の風を北西ふりて翁の吹しりて果を思ふ  
牛一ておけあふ山子来りぬれ石山へ行てはれも秋風の風情を  
家子果やあけし句意あけし石山の果を思ふ山とてあまのこ  
さもけりぬあまのこ石山子秋風を思ふあまの翁の吟を解しけり  
後さるる句

楳の楳やまけて写をむまりく 昌房

閑寂山居のさゆを作しりて言外の楳しりてさるる句

里ハいよ夕やしきあつさば 何処

里と夕夕やし時のあまのこけさるるふけ山居をいづくにも涼に  
任りていづく句意涼しき哉書一や化れり句意涼し

啼やいづこけりてあまのこ 越人

是亦閑寂を探りし句意いづこけりてあまのこけりてあまのこ  
林しりてあまのこけりてあまのこけりてあまのこけりてあまのこ  
すく思ふ心やるといふ一語の楳しりてあまのこけりてあまのこ  
鳴は多く電乃けりてあまのこけりてあまのこけりてあまのこ





本ニ俳諧ト書ス故ニ歌人ハ惣テ言偏ニ从<sub>ル</sub>宗鑑貞徳  
宗因ハ連歌ノ俳諧体ナル故ニ亦從テ言偏ヲ用ユルニ言ニ  
从フトキハ俳謗ノ誹ニソシルト云一ニ字彙ニ芳微切音飛  
也人篇ニ作ルトキハ皮皆切雜戲也音佩故ニ諸說紛々トノ  
或ハ貫之カ書風凡ニアラザルヨリシテ草書ノ言人ノ篇畫  
マギレヤスキユヘ人篇ヲ言篇ト見誤リタルヨリ流布ノ本ニ  
言篇ニ書タルナド云リイカニモサ思ハルハ一ナルニヤク唐土人  
モ誤タリト思ハルワハ隋書<sub>卷五</sub>陸爽傳云好為誹諧雜說  
又柳顧言傳ニ應荅如響音性又嗜酒言雜誹諧ト見ヘ  
タリコレニ據トキハ和漢古ク誤リ混メ通用セリトハ深ク  
尤ムベカラズ或人祖翁ニ此ヲ問フ翁荅テ曰ク言篇人篇ノ

說多シトイヘ凡我ハ人篇ノ方ニ書馴<sub>レ</sub>タバ筆癖トナリテ人篇  
ノ方ヲ多ク用ユルニ深キ意ハ知ラズト申サレタルハ難有一<sub>レ</sub>ト  
首直也說文疏云直者正也言首為<sub>レ</sub>一体之正韻  
与響音同實<sub>レ</sub>而精者曰聲朴<sub>レ</sub>而浮者曰響音サバコ  
ニハ俳諧ノ正風吟聲ニト云美<sub>レ</sub>之聲ノ物ニ應スルヲ響音ト云  
吟句モ各ク吟シ出シテ人ノ耳ニフレルトキ則<sub>チ</sub>響音之首ヲ初ト  
解スハ非也  
非比<sub>ス</sub>彼<sub>ノ</sub>山<sub>ニ</sub>寺<sub>ニ</sub>偷<sub>ミ</sub>衣<sub>ヲ</sub>朝<sub>レ</sub>市<sub>ニ</sub>頂<sub>ク</sub>冠<sub>ヲ</sub>笑<sub>ニ</sub>只<sub>ニ</sub>任<sub>ス</sub>心<sub>ニ</sub>感<sub>ス</sub>  
物<sub>ニ</sub>寫<sub>ス</sub>興<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>已<sub>ミ</sub>矣  
清正記<sub>古橋清介氏保書云清正或時</sub>  
伏見ニテ論語ニ手ツカラ朱引ヲ致シ給フヲ子飼

ノ猿ガ常々傍ニ居テツクト見ケルガ清正用有テ立レ  
タル跡ニテ此猿筆ニ朱ヲ付論語ニメタト塗付タルヲ見  
玉ヒテ上古ヨリ猿ハ見ルヲ学マナブト見ヘタリ昔シアル僧終  
南山ニ隠ル時ニ袈裟ヲ失フニ猿コレヲ盗ミ其身ニ着テ  
岩上ニ坐禪ス君羊猿コレニ效エラヒテ坐禪スコノ猿タハフレニ袈裟  
ヲカケ人マ子ニ坐禪シタレト其功德ニヨリテ成佛シタルト  
キケバコノ猿モワルサニ論語ニ朱ヲ付タレト少シハ聖人ノ道  
ニ叶フベキト宣テ一笑シ玉フト云く是等ノ事ヲ取テ書シ  
ナルベシソハ清正唐宣宗ノ古事ヲ記臆セラレテ申サレタ  
ルナルベシ林間録ニ云唐宣宗甲戌大中八年終南山ニ初  
メ一僧アリ菴ヲ結テ定ヲ習フ一日猿アリ其伽黎衣

袈裟ノイ也被テ安坐ス群猿有ニ隨テ皆定坐ヲ習フ脱去スル  
者アリ今五獼猴ノ塔アリ至元宣宗御製衣ノ讚アリ略カク之余未  
見林間録全書故ニ文章違誤アルベシ追テ正スベシ隨齋成美  
ハ古今著聞集卷之二十三馬ヲ竊ミ來レル猿ノ一ナルベキヤト云ハ  
穩當ナラズ又佛說獅子月本生經ノ猿ノ因縁ト事ハ法苑珠云者  
アレド穩カナラズ前漢書五被傳云フモク以為漢庭公卿列侯皆如沐  
猴而冠耳ノイカノ故事ヨリ出タリ一轉作ノ文ト知ルベシ朝ハ朝廷  
ヲ云市ハ人ノアツマルヲ云人ノ多クアツマリテ高賈スル処ヲ云又  
小補韻會ニ朝時ト而市スルヲ朝市ト云ルハ爰ノ意ニ違フ  
ニヤ又項羽本紀ノ楚人沐猴而冠スルト云ヲ取レリト云リイ  
ツレ是等ノ故事ヲ取テ書タルモノト知ルベシ非比笑トハサヤ

ウノ戯言アルヒハ笑話ニ似セテシタルコトハナイ只心ノ物ニフレテ感  
動シ興ヲ起シ事情ヲウツシナスノミノコト云義ノ譬ハ初時雨ノ  
寒キニ伊賀ノ山中ニ猿モ小篋ヲホシガルベシトセシ女情ノ処ヲサスナリ  
詩ノ集註ニ興者先言他物以引起所詠之詞也ト云ニテモ考フ  
ベシ詩ノミニアラズ俳句ノ上ニテモ亦多クアルコト猿篋ノ句ハ即  
興ニ

洛下逸人凡兆去來隨翁遊學棋館竹窓  
躡等凌節斯有歲

洛下トハ唐土ノ京師ヲ洛陽ト云ソハ洛水ニ因テ名ツケシコトソレニ  
比シテ吾邦ニテモ文人騷客洛陽ト云洛陽城下ト云ノ意ハ逸ハ  
逃ニ世ヲノガルトイヘル義ニ凡兆ハ醫ニ逃レ去來モ此時既ニ

致仕セシコト故ニ逸人ト云ニ去來ト凡兆トハ俳位五六等ヲ隔テリサ  
レハ去來ヲ以テ上トスベシ故ニ其角カ序ニハ去來凡兆ト書リ丈艸  
夕爰ニ凡兆ヲ以テ上ニ出スハ凡兆ハ疎ク去來ハモトヨリノチナミヲ  
カシ文ニ親シキヲ後ニシタル之信義ヲ以テスルガ故ニ等ヲコエル  
トハ棋館ト云ヲ受テ云ニ梅品ソノ品種多キニヨツテ云ニ節ヲ  
凌トハ竹窓ニ對シテ云ニ竹ハ其裡クニ節關アリテコエガタキラ  
云ニ言ハ難キヲ勤メルノ義ニ取タルコト知ルベシ

屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐腋白裘  
者也

屬ハ近者ニゴトゴト讀ベシ玩弄ハモテアソブト云フニ珍重シテ朝ニ  
讀ミ暮ニ誦シテ熟ヨバスルト云義ニ狐腋ノ白裘ハ孟嘗君ノ故

事之玉帛講德論千金之求衣非一狐之腋也又孟嘗君  
が傳ニ狐白裘ト見ヘタリ是ハ狐ノ腋ノ下ノ白キ処バカリテ造リ  
タル裘ノ一ニシテ世ニ得難キモノトス因テ千金ノ裘ト云之絶超トハソ  
ノ千金ノ狐白裘ニモハルカニコエマサリタル珍重スベキモノト思フト云義

於是四方吟友憧々往來或千里寄書書  
中皆有佳句日蘊月隆各程文章

易云憧々往來朋從爾思憧々ハ人ノツラナリテ往來ノ夕ヘザル  
貌ヲ云詩大雅雲漢云蘊隆蟲々蘊ハ聚之隆ハ盛之四方ノ吟友  
ヨリ來ル句トモ日クニ積リアツマリ月々ニサカニナリタリト云ル  
義ニサカニナリトハ多キト云ル意之禮記ノ註ニ隆猶多也ト見ヘ

タリ程ハ說文ニ品也ト云リ又文中子孝宣章程核名實ト云ルナド  
ミト品々ト云ル義ニノコ、ハ各々句々文章ノアヤカサリ一様ニアラス  
シテミナ區々ト云意也

然有昆仲騷士不集錄者索居窟栖為難  
通信

昆ハ兄也コノカミト云フニ仲ハ次也俗ニナカアニト云ニ同シ丈  
艸ヲノレヲ末子ニ準シ巴レヨリ長ゼルモノヲサシテ云意也  
伯仲ト云モ同義之兄ヲ伯ト云ト字彙ニ見ヘタリ同門ノ能  
友ハ弟子兄弟ナレハ丈艸謙讓シテ此集ニ洩タル素堂支考許  
六ガ輩ヲサシテ巴レヨリ長名モノトスルノ意之騷士ハ說文ニ今謂詩人  
為騷人是也倂フテ又俳士ヲサシテ云禮記檀弓ニ子夏が語ニ吾

離群而索居亦已久矣ト見ヘタリ注ニ索散也トアリシカレバ住処  
定マラサルノ意ニ散ノ、ニ別居ルト云義ニ竄ハ逃匿ノ義ニテノガレ  
カクレテ住ト云義ニ栖ハスミカト訓ズ為難通信トハアチコチニ居住ニ或  
ハ隠レスミテ音信ノタヨリモナシガタキ故ニト云意ニ

且有旄倪婦人不琢磨者鹿麕言細語為喜  
同志雖無至其域何棄其人乎哉

說文云旄與耄同ヲヒボルト云フ之倪ハ弱小之稱也年老タル人或ハ  
少年ノモノ或ハ婦人ト云義ニ旄倪ノ文字ハ孟子ニ見ヘタリ不琢磨  
者トハ稽古修行ノナキモノヲ云鹿言細語トハ意深カラスルヲハ俗  
言方言ノ類ヲ云之東坡全集卷之十四龍尾硯歌ニ鹿言細語都  
不擇春蚓秋蛇隨意畫ト見ヘタリ 雖無至其域ハ域ハサカヒト云フ

ニシテ蕉翁ノ俳道ノ深キ處マデハ學子ヒ得子ド、云フニ

也果分四序作六卷故不遑廣搜他家文林

果ハ晉語ノ註ニ竟也ト見ヘタリサレバ此集撰終リテト云義ニ四  
序トハ四季ヲ云ニ作六卷トハ四季ヲ一卷ツ、ニナシ附合ト幻住菴  
記トヲニ卷ト分ツニ四維六合ニ準ゼシマ廣ハ廣博ノ云ニヒロクアマ子  
クト云意ニ他家トハ師家一派ノ外ヲ指テ云ニ貞徳宗因ノ派ナド皆  
他家ト云ベシ文林トハ詩人文人ノ多キヲサシテ詩林又ハ文林ナド云  
ソレニ倣フテ俳諧ニモ文林トセシニ其他門他家ノ材人ヲ廣クサガシモ  
トメルニ暇アラズ故ニ同門中ノ旦暮會同スル輩ノ句ノミヲ書記スルノ  
ミ夫モ文音ノ通シ難キハモラセシト云意ニ前後ノ文ニテ會意スベシ



維ビ耽タ元祿四稔辛未仲夏余掛錫於洛陽  
旅亭偶會兆來吟席見需記此更題書尾  
耽タ字字書ニ見ズ按スル昔ハ時ノ古文字ニテ通例ニ昔ヲ耽ト  
書シ出ヲ出ト思ヒテ之ノ字ニ誤寫セシニヤ猶可致シ稔ハ古人謂フ一  
年ヲ為ス一稔取穀一熟也錫ハ杖ノ一僧家ニテハ行脚ニ必ス用ユ  
ルニサレハ掛錫トハニバラク休ミ又ハ逗留スルヲ云フ掛ト置テ而不用ス  
云フ釋氏要覽云遊行僧ヲ為ス飛錫安住僧ヲ為ス掛錫  
卒ニ援毫ヲ不レ揣拙ハ庶幾ニ一ニ纂高張ヲ有レ補ニ于詞  
海漁人云  
卒ハ終シソコデモツテトウクト云俗諺ニ同シ不揣拙トハ揣ハ度量スリ  
ニ不器用ナルヲモハカラズシテ嗚呼ガマシク書タリト云義ニ庶幾

ハ冀也又尚也コヒ子ガフト云フ俗ニトウソト心ニ欲スル意ニ下ノ文ヲウ  
ケテ云フ高張ハ皇張ト同シ皇ハ大也張ハ夸ナル也一ニ纂ト云フヨリ皇ヲ  
高ニカエ用ルハ洒落也タカクカハゲテホコリカニスルト云義也詞海ハ  
詩文章ノオ士古今多ク出テ海水ノ盡ルトナキガ如シサレバ詞海  
ト云フ俳諧モ又サノ如シ海ト云ヨリ漁人ト云フ學フ人ヲ指テ云ナリ  
徧漁獵ス百家ト云フ同意ニ又一纂高張ト云ル処ハ一網ト云フベキ処ナレド  
猿蓑集ノ名ノ緣ニヨリテ首尾ヲククリタル文ニハ斯ハ洒落シ名ニ  
ト知ルベシ  
風狂野ト衲丈艸漢書  
風狂ハ風騷ト云フ同シ花鳥風月ノ情ニ狂ヒサマヨフモノト云義  
心僧侶自ラ稱シテ野衲ト云卑下ノコトバシ野ハイマシト云義也



幻術にゆづりやといふ意こゝろちがてあぢきまのこゝろ  
志すもみづゝゆに幻術をなすゝ意こゝろ思ふぢがべんこ  
ハ蕉翁の俳句とあぢきまのこゝろとすにけりこゝろ人其前  
が師の集乃序にいふこゝろを書かざるや何と云れバ祖公羽  
の俳諧ハけ猿蓑に成就しゝゝもれハ大切の集こゝろさ  
か

○五音 アイウエオ かれ如く心得あり

○第二卷冬之部史邦白膝突

古説に膝突ハ小羊垂の縁りしこゝろと云下はなまゝその送風  
こゝろハ地下人の大内のりこゝろぬらぬらアアアアと取れたる  
膝突ハ今も屋上にて月ひかふふりしこゝろ大内人ハよく知あま

こたといふの表と八角ハアアアアアアアアアアアアアアアア  
用ひるこゝろも屋上ハおなじこゝろといふ古の送例を思ふ  
こゝろを月をこゝろやほみ砂に候かといふ付ハ内裏の屋上ハ  
まゝ何れもぬらぬらに内裏ハ屋上ハ仕候こゝろをいふ何れに  
仕候こゝろや影方影掃こゝろ其訳更ニ白の上にてハまれが  
上まれのハおのほ神楽もてハおのほやおのほ神楽ハ昔時内待  
所の序神楽お分真行ありこゝろや先ハ土月屋上にて行ハ  
こゝろハ夫がこゝろ治定ハおのほ神楽もたれハたこゝろハ思ふにけ  
白ハ例のお語ぬらぬらをいふもハおのほ神楽もたれハたこゝろハ  
七巻ハか茂のまんこゝろまづハか茂のまのこゝろハか茂のまのこゝろハ  
こゝろハか茂のまのこゝろハか茂のまのこゝろハか茂のまのこゝろハ

おもしうふあななきをふくすやうなるもの色といふて  
れいといふおもしろくもむくはてしなくもさかしく  
ついでふく肩よりさかしくもあななきもさかしく傍注  
主殿以役之立金輪積薪官人着膝突とて系抄より  
哥の色乃注本末のさかしくもさかしく  
このお徳れ抄作られたるにさかしくもさかしく

第四卷秋之郊之道白養

顧野玉篇云焦兩切乾魚脂源順和名類聚抄云辨色立成  
云養魚布可居媛反今按未詳これより時ハ美魚をふくし訓也  
る新撰字鏡以来古く訓也事にて源順乃頃も既に訓の  
ゆへて是れも指さるるや詳まらざる今按康熙字典に吳地記

ヲ引テ云闔閭入海會風浪糧絶不得渡王祥禱見金  
色魚逼而來吳軍取食及婦會群臣思海中所食  
魚所司云暴乾兵素食之甚美因書美下魚養字類篇  
或作鱻又云音想乾魚腊也これより考ふると本物綱  
目の李時珍が説に烏賊魚乃ち一たよを養と云にさかしくかふ想  
一吳地記云一所の尋常何る魚也思これぬんるもの物  
を句に作るなれやされど古来よりふくし訓にたれは物な  
くしと名何れに理あり又作者もあななきといふは他  
るなれはこれあり之道ハ段曲を業とせしなれハ本物綱目を  
見ればこれより考ふれば李時珍がいふに養の字を用ひたるより  
アそちを考ふればこれより考ふれば李時珍がいふに養の字を用ひたるより

そひひの中略と思ふ。ひふの音通してふくく抄したるこ  
と知るなり。ひふの反ひふれが三等の但し。ひふの譬喩体  
し。本條の下に記したるぬく心はぬく。右のぬく解す  
し。養魚乃字にふくの訓自ら分明にされど古来より明解  
るべし。又明證もあつて。理に於ておぼやまれば後人  
の考ふが如く一即ち記し。養魚の條をひふ下に養魚の字にふ  
くの訓あり。と注し。ひふは浅見乃誤るべし。和名抄をりて  
合せて誤を正すの。又今ふくく云魚のひの下に説く。ぬく西  
ふり俗稱なり。手和名にひふと云ふ。と云ふ。

○第七卷跋文ノ文艸漢書

顧言。按スルニ漢ハ男ト云義也。輟耕録曰。今人謂賤丈夫為漢子。  
又トレヨリタルヲトコノヲ老漢ト云フ。王君玉雜纂ニ不自量老  
漢嬾妻醜。又ツンボノヲトコノヲ聾漢ト云フ。人天眼目ト云フ書  
ニ無星秤聾漢始堪論的當云々。コノ類猶多シ。コレニ據テ攷レハ文艸  
ト云男書<sup>カキ</sup>タリト云意ニシテ例ノ洒落ノ作文ト見テ宜シカラズ。雖  
然先考下世已十年不堪遺憾。姑録于此。以就識者之正焉。



勢多為河心及岸  
流字如舟名流  
舞之舞求  
多安及自然  
月夜

字為一及河  
抄之  
河心及岸  
流字如舟名流  
舞之舞求  
多安及自然

多夜居るの如く  
くもあまの夜もあ  
まの夜もあまの夜  
もあまの夜もあ  
まの夜もあまの夜  
もあまの夜もあ  
まの夜もあまの夜

魂香かたの命の  
波のうらみとあ  
まの夜もあまの夜  
もあまの夜もあ  
まの夜もあまの夜  
もあまの夜もあ  
まの夜もあまの夜





諸國

書林

京都書林

大坂

書林

勢州津

紀州若山

河波德島

土州高知

備中倉鋪

雲州松江

長門萩

肥前佐賀

肥後熊本

薩州鹿兒島

山形屋傳二工門

坂本屋喜一郎

天滿屋武兵衛

田村屋松治郎

大田屋六藏

尼崎屋喜三右工門

山城屋彦八

紙屋惣右工門

小嶋屋儀八

山崎屋助治郎

出雲寺文治郎

勝村治右工門

村上勘兵衛

敦賀屋九兵衛

秋田屋太右工門

河内屋喜兵衛

河内屋源七郎

河内屋太助

伊丹屋善兵衛

河内屋茂兵衛

三條通升屋町

寺通松原町

二條東洞院上七

心社橋南二自

同通安堂寺町

同北久太郎町

同北久宝寺町

同安上町

同久宝寺町

同博勞町

東都

書林

日本橋通丁目

同 二丁目

同 三丁目

芝神明前

同

同

大傳馬丁目

通油町

馬喰町丁目

馬喰町丁目

通旅籠

横山

同

浅草茅町

室町二丁目

下谷御成道

同

本石町十軒店

同

須原屋茂兵衛

山城屋佐兵衛

須原屋新兵衛

須原屋佐助

岡田屋嘉七

和泉屋吉兵衛

和泉屋市兵衛

丁子屋平兵衛

藤岡屋慶治郎

山口屋泰兵衛

森屋治兵衛

出雲寺方治郎

和泉屋金右衛門

須原屋伊八

大坂屋藤助

紙屋徳八

英文藏

椀屋定助

椀屋伊三郎

